密着における乗り越え

――メルロ＝ポンティ『パロールの問題　一九五三―一九五四年　コレージュ・ド・フランス講義　ノート』についての一考察

加國尚志

はじめに

モーリス・メルロ＝ポンティがフェルディナン・ド・ソシュールの言語学から大きな影響を受けたことは周知の通りである。一九四五年の『知覚の現象学』刊行後、彼の問題意識が「行動」や「知覚」から「言語」の問題へと向かっていった時期に、彼は幾度もソシュールの名前に言及している。[1] 彼は、エルンスト・カッシーラーと並んで、[2] ソシュールの言語学の哲学的意義をいち早く認めた哲学者であったこともすでによく知られているところである。『知覚の現象学』以降、『世界の散文』や『真理の起源』といった著作を計画していた[3] メルロ＝ポンティの思想の歩みを理解するのに、彼がソシュールをどのように理解していたのか、という点は非常に重要である。

もちろん、メルロ＝ポンティのソシュール解釈については、これまで非常に多くの研究業績が存在し、日本語のものにもすぐれたものが多い。[4] メルロ＝ポンティがソシュールの言語学についての哲学的解釈をどのように行なっていたか、ということについては、すでに研究史には一定の蓄積があり、何も特別に新しい問題ではないと言える。

メルロ＝ポンティのソシュール解釈については、これもよく知られている通り、ソシュールの「ラング（langue　言語体系）」と「パロール（parole　ことば）」の「区別」[5] から、「パロール」を重視する言語論を展開したこと、またそこからラングの「通時態（diachronie）」とパロールの「共時態（synchronie）」の区別において、両者が不可分に絡み合っていることを認めながらも「共時態」の概念を重視したこと、語の意味をラングの体系内における他の語との差異（différence）における「弁別的（diacritique）」価値と定め、そこから語の意味の「恣意的（arbitraire）」性格を強調したこと、などが挙げられる。まとめて言ってしまえば、メルロ＝ポンティの解釈から導かれるのは、統辞法や語彙の規則性や拘束性よりも、その変動可能性や偶然の介入可能性を強調する、発話行為を重視する言語論であり、ある言語体系内における語の意味の類縁性よりも恣意性を強調する、意味の間接性の言語論である。それは複数の「語る主体（sujet parlant）」における間主観的な了解に基づく伝達可能性に言語の本質を見ようとする言語論であると言えよう。このことも、すでに多くの研究が明らかにしてきたことである。

他方で、こうしたメルロ＝ポンティのソシュール解釈が言語学者たちからは批判されてきたことも、周知のことであり、これまでの研究もそのことに言及している。ソシュールが言語学に期待していたことをことごとくひっくり返すようなメルロ＝ポンティの解釈は、「誤読」[6] と形容されることもあるように、ソシュールの述べたことをそのまま敷衍したようなものではない。メルロ＝ポンティを擁護するメル

ロ＝ポンティ研究者の側からは、メルロ＝ポンティの解釈が、字義通りの解釈ではなく、むしろソシュールの述べようとしたことを創造的に取り出したものとする見解が出されてもきた。

メルロ＝ポンティはなぜそのような解釈を行ったのだろうか。それは誤読による、何か思い違いや拙速に基づくものなのだろうか。独善的な解釈者が行うように、自説に有利になる見解を勝手に読み込み、自説に有利な概念や用語を引用し、自説の根拠づけや権威づけに利用しようとしたのだろうか。それとも、そのような解釈を行う解釈者の読解の背景があり、その背景を理解すれば、そのような解釈の必然性が見えてくるのだろうか。

メルロ＝ポンティのソシュール解釈を論じる際に解釈者の前に存在したのは、メルロ＝ポンティのソシュールへの言及が断片的あるいは暗示的で、十分な分量のあるものではなかった、という事情である。断片的な短い言及や切り詰められた要約だけを読めば、メルロ＝ポンティがソシュールを誤読しているように見えてしまうのも、無理はなかった。メルロ＝ポンティの解釈の真意をつかむために、他の著作なども含めてメルロ＝ポンティの言語論全体の文脈を復元することを、これまでの解釈者たちは行ってきたのである。

二〇二〇年に公刊された『パロールの問題　コレージュ・ド・フランス講義　ノート　一九五三―一九五四』[7]は、メルロ＝ポンティが言語の問題にどのように取り組んでいたのかを知る上で重要な資料である。この講義では、ソシュールについての解釈が行われ、メルロ＝ポンティがソシュールの『一般言語学講義』をどのように読んでいたのかがわかり、興味深い[8]。他方で、この講義はただソシュールの解釈に当てられたのではなく、クルト・ゴルトシュタインの失語症研究やプルーストの文学作品の解釈なども行われている。もちろん、講義のためのノートは著作ではなく、あくまで教育活動のために準備されたもので、著作と同等に論じることはできないが、同時に自身の著作のための準備でもあったわけだから、この講義を丹念にたどれば、メルロ＝ポンティのソシュール読解の背景をたどることができるだろうし、『世界の散文』という著作を計画中であった彼の言語論の中心にあった問題に触れることができるだろう。そして、そのことは、結局は完成することのなかった彼の言語論についての理解を豊富化することにつながるにちがいない。

以上の研究史的観点を踏まえつつ、枚数も制限されている本論文では、メルロ＝ポンティの哲学における「語る主体（sujet parlant）」の概念の内実について、『ことば（パロール）の問題』講義から可能となる考察を加えてみたい。メルロ＝ポンティの言語論が「語る主体」の概念をもとに、従来の主知主義的な言語論と経験主義的な言語論を批判するものであることは、よく知られている。「語る主体」の概念はソシュールの言語学の中にも登場するわけだが、その内容を把握することが、メルロ＝ポンティの言語論を理解する上で重要である。

「語る主体」の概念において、そこで言われている「語る」ということは、いったい何を意味しているのか。どのような事態、どのような現象を指しているのか。主体が語り、その主体が「語る主体」と呼ばれるとき、その主体はいったい何を経験し、その経験が、ひとが語ったり発話したりする可能性と結びついているのはどのようにしてなのか。

おそらくは一般的な哲学の問題とも結びつくこうした問題を、この講義の時期にメルロ＝ポンティがどのように考えていたのか、どのように考えようとしていたのか、ということを、本論文では論じていくことにしたい。とりわけ、この講義でソシュールと並んで論じられて

いるゴルトシュタインについてのメルロ＝ポンティの解釈を見ることで、彼のソシュール解釈の背景と「語る主体」の概念について明らかにし、可能な哲学的問題設定をそこに素描してみることにしよう。

一　言語学批判と「ことば（パロール）」への回帰

この講義では、ソシュールについて論じられる前に、従来の言語学への批判が行われる。そこではある種の客観主義が批判されているわけだが、それはとりわけ「論理主義（logicisme）」と「歴史主義（historicisme）」へと向けられる。[9] たとえばインド＝ヨーロッパ語族における「ある」という動詞の構成や主語―述語―繋辞の図式が「形態素」として文法的な結びつきから説明される、というような場合である。

ひとはある文化の、ある言語体系（ラング）の歴史の内に閉じ込められ、その構造から抜け出すことができないのだろうか。メルロ＝ポンティは「密着そのものにおける乗り越え（dépassement dans l'adhérence même）」[10] があることを主張する。なるほど、よほどの多言語使用者でなければ（あるいは、多言語使用者であっても）、母語として習得し使用している言語体系（ラング）の統辞法の形式や構造から離れては言語を使用することはできないだろうし、そのかぎりでは、その人の意識や思考はその人の属している言語体系（ラング）の枠内にとどまることになろう。インド＝ヨーロッパ語族における主語―述語―繋辞（「ある」）の図式は、その図式を有する言語を使用する人の論理的思考の枠を決定しているようにも見えるだろう。

メルロ＝ポンティはこのような「論理主義」と「歴史主義」を批判する。「ある特殊な言語体系（ラング）を話す」ことと、「その言語体系（ラング）を通して存在を目指す」こととは「同じこと」である、とメルロ＝ポンティは述べている。[11] すなわち、インド＝ヨーロッパ語族に属している人は、その言語体系で話す、つまりその言語体系に密着する、と同時に、そのことによって「存在を目指す」、つまり「存在」を語るひとつの志向を持つこととなり、特定の言語体系に従属するだけではなく、一般言語学（linguistique générale）の主題となるような場面に引き出されているのである。メルロ＝ポンティは次のように述べている。

「偶然的なひとつの言語との結びつき（歴史主義）を理由として、あらゆる思考がまちがっているとか、特殊なものである、と言うことが重要なのではなくて、各々の言語体系はその起源から汲んでいるのだから、ある意味ではそれらの思考はすべて正しい、と言うことが重要である。それらの真理を相互に分節化させることが必要なだけであり、文法的カテゴリーでしかないものを論理的カテゴリーのように課すべきではないし、一般言語学をひとつの文化の偽の明証に基づいて構築するべきではないのである。他の諸文化の役割は、私たちの思考の価値を貶めることではなく、私たちの思考を理解するために私たちの思考を拡散させるように仕向けることにある。言語学の役割は、私たちにひとつの哲学を与えることではなく、私たちが持っていた哲学の一面性（Einseitigkeit）を見させながら、私たちがひとつの哲学を持つことを準備することにある。」[12]

特定の言語体系（ラング）の研究の言語学は、その言語体系内部へ語り手の帰属性や被拘束性を強調する傾向をどうしても持ってしまうが、言語を文法や語彙から見るのではなく、ひとが「話す」場面で起

こっていることから見るなら、ある文化や言語体系の歴史的な枠組みも「運命」ではなく、「動機（motivation）」であり、その言語体系の内部では言われず、知られていなかったものによって異議を唱えられていることが理解されるだろう。つまり、そこには文化や言語体系による基礎づけと同時に、その動揺も内包されているのである。メルロ＝ポンティが「ことば（パロール）」、つまり「話す」という行為における言語使用への回帰を主張するのは、まずは歴史主義からの脱出の試みであったわけである。

「私たちは、語（mot）や記号（signe）ではなく、ことば（パロール parole）に密着した思考を行うことで歴史主義から離れていく。私たちは偽の明証に対抗して、おそらくは絶対的思考ではなく、問いかける能力、無制限なもの（non-limitation）を呼び出すのである。」[13]

ついで、論理主義が批判される。メルロ＝ポンティによると、それは「素朴な言語学的意識」[14]であり、自分たちの言語体系を絶対化する歴史主義と変わらない。論理実証主義の立場をとる「ウィーン学派」や「ワルシャワ学派」の出発点は、論理学が「言語としての科学理論」であるというところにあり、そこでの言語は、「命題の形成と変形の普遍的規則からできた純粋統辞法」に基づいている、とメルロ＝ポンティは指摘する。

「明晰性と演繹的展開によって確立された命題はすべて分析的であり、その内容が何であれ真であり、それは経験的命題の〈操作の道具〉である。これがカルナップの出発点である。」[15]

それに対してメルロ＝ポンティは、次のように批判を加えている。

「明晰なものは分析的ではない、あるいはまずもって一貫したものなのではない。この明晰さは語の明晰さ、語の定義であって、言われたこと（choses dites）の明晰さをもたらすのではない。分析的明晰さは必要条件ではなく（意味はその向こう側にある）、十分条件ではない（実のところ、この明晰さは、あらゆる内容の外部にあるのだから、意味（sens）を持たない）。」[16]

それでは、論理主義が歴史主義と同断である、という判断はどこから出てきたのか。論理主義は、歴史主義のように経験的・事実的な言語など問題にせず、純粋に普遍的な形式としての言語を扱っていると一般的に考えられているのではないだろうか。これについて、メルロ＝ポンティは次のように解釈している。

「まさに（いわゆる）論理的な明晰さはその光を事実的状況から引き出すしかない。つまり、これらの論理学者たちがインド＝ヨーロッパ語の言語体系（ラング）を話すという事実である。この明晰さが説得力を持つように思われるなら、それはあるタイプの語ることの沈澱であり、それというのもこの明晰さは語る主体と考える主体の現実的生活には明らかに不適合だからである。あらゆる論理主義は、この経験に無知であるのと同じく、この経験の形式のひとつ、この経験の結果のひとつでしかない。」[17]

論理主義（論理実証主義）に対して、厳しい評価がなされているが、たしかに、「言語の限界が世界の限界である」と言われても、その

「言語」は、ドイツ語なのか、英語なのか、それとも、いかなる言語においてもそうであるのか、よくわからない。「ドイツ語の（あるいはインド＝ヨーロッパ語の）限界が世界の限界である」と誰かに言われれば、私たちは顔を見合わせるだろう。また経験的で自然的な特定の言語を還元して、アプリオリに純粋な形式として記号相互の関数関係にまで還元された命題のことが言われているのなら、それは「言語の限界」ではなく、要素間の関数的対応関係の限界ではないか。それは「言語」の限界そのものと同値なのか。メルロ＝ポンティが「素朴」と批判的に形容しているのは、論理主義が、そのような論理形式が可能になる言語体系（ラング）に歴史的に内属しながら発話する（命題を語る）ということの内実を通過してしまう、こうした思い込み、あるいは無反省のことである。

では、メルロ＝ポンティは何に着目するようにうながすのだろうか。論理主義への批判的対立として「無意味」を称揚するのではなく、「意味の出現（apparition des sens）の諸条件そのもの」[18]を重視することをメルロ＝ポンティは主張する。私たちは、ある言語体系とその統辞法（syntaxe）に従属することによってしか、意味のあることを語ることも思考することもできないが、まさにその統辞法に従属することによって、その統辞法を超える何ごとかを語り、思考することもできる。まさに「密着における乗り越え」と形容できるような機能をメルロ＝ポンティは「語る」ことの内に、すなわち「ことば（パロール）」の中に見出しているわけである。

このような「歴史主義」と「論理主義」への批判は、最終的には、言語を外的に観察し、言語の「内面」を考慮しない態度に対して向けられていく（それは、またソシュールの後継者への批判という別の文脈では、言語を「情報」として物のように対象化するサイバネティクス[19]に対しても、文法的行動に還元する「機能主義」[20]に対しても、「構造」として同様に対象化するイエムスレウらのコペンハーゲン学派[21]にも、ローマン・ヤーコブソン[22]にも向けられている）。「歴史主義」と「論理主義」による言語の科学の客観化は、言語体系を内的に理解することは不可能で、外的に比較するしかないと決めつける「懐疑論」に陥るか、自分の所属する（あるいは特定の）言語体系の特性を絶対視する「独断論」に陥ることになる[23]。メルロ＝ポンティが主張するのは、「間主観性」の観念に立ち返ること、すなわち「言語体系」の複数性を認めつつ、そのそれぞれが一人称的なものであること、つまりそのそれぞれの内部で理解すること、つまり「ことば（パロール）」に立ち返り、諸言語体系（ラング）の複数性と相互性を比較することである。ソシュールの一般言語学の試みが可能にするのは、このような「ことば（パロール）」への回帰による一般的な言語現象の解明なのである。

こうして見てくると、メルロ＝ポンティのソシュール読解が、文法や語彙の研究をもって言語の科学的研究の本旨とする言語学者や、言語を音素や形態素などの要素に還元して分析することを旨とする構造主義者から「誤読」と批判されたのも、むしろメルロ＝ポンティとしては意図してのことであったことになろう。そもそもメルロ＝ポンティはソシュール解釈に先立ってそのような言語科学的思考に対して批判を行っていたのであり、このような批判的視点から、言語科学の独断への批判者としてソシュールを評価していたのだからである[24]。

二　言語の内面としてのパロールと「語る主体」

この「論理主義」と「歴史主義」を乗り越えるためにメルロ＝ポンティはソシュールの『一般言語学講義』を解釈していく。もちろん、

ソシュールは外的に観察された言語体系（ラング）を認めているが、もう一方で「言語体系（ラング）が現在において結びつけている語る主体たちにとっての言語体系（ラング）」[25]という側面を認めていた。当初は、ソシュールは「ことば（パロール）」を狭い意味で、つまり、社会制度的な規則としてのラングと対立する個人的な実践としてとらえていた。しかし、ソシュールはそれ以上のことを述べている、とメルロ＝ポンティは解釈し、「言語体系（ラング）の力は言語体系（ラング）とことば（パロール）の関係が原因と結果の関係であることを意味しない」[26]として、ソシュールから次のように引用している。

「言語体系（ラング）は実体（entité）ではなく、語る主体たちにおいてしか存在しない。」[27]

「根本のところで、言語体系（ラング）においてはすべては心理学的であり、言語体系（ラング）の物理的、機械的現出はそこに含まれている。」[28]

「言語体系（ラング）を進化させるのは、ことば（パロール）である。」[29]

「言語学的対象は書かれた語と話された語との組み合わせによって定義されるのではない。後者（話された語）のみがこの対象を構成する。」[30]

このようなソシュールの文言から、メルロ＝ポンティは「言語体系（ラング）の内面（un intérieur de la langue）」の存在を指摘し、それが「ことば（パロール）」である、[31]としている。言語体系（ラング）はそれを「話し、よみがえらせる（réanimer）」主体にとってのみ意味をもつ。[32]言語体系（ラング）は有機体のようなシステムをなすのであり、それはむしろ「交響楽」に比されるものであり、交響楽がその部分のどれかひとつと同じものではないように、言語体系（ラング）はことば（パロール）ではないが、交響楽がその部分の演奏がなければ存在しないか、別のものになってしまうように、言語体系（ラング）は話されなくては、つまり、ことば（パロール）によるのでなくては、存在しない。

そこから「言語体系（ラング）とことば（パロール）の統合（une intégration langue-parole）」[33]がソシュールのうちには見出され、言語体系（ラング）＝通時態、ことば（パロール）＝共時態という単純な対立ではなく、「汎時態（panchronie）」を否定して、語る主体を言語体系（ラング）における「状況（situation）」に置いて理解しなくてはならないことになる。[34]そして、そこで、ソシュールにおける「構造（structure）」[35]の意義が示されることになる。

「論理主義と外的な説明とを乗り越えることを正当化する肯定的な現象とは、構造（構造言語学）の概念であって、ソシュールはそれを一方では言語学的法則と客観主義の発想に対立させ、他方では論理主義と言語体系（ラング）の理想化とに対立させている。構造とは、全体（ensemble）、システム（système）であり、その原理がスタイルあるいは一貫した変形としてしか、ある不在としてしか明らかとならず、現れることのないものである。歴史や言語学に適用するなら、これは、物と精神の間で、外面性（複数性あるいは不透明な事実）と内面性（概念の明晰さ）の間の媒介となるのである。」[36]

したがって構造は、「語る主体に言語体系（ラング）が現れるしかた」[37]であり、「発話行為（actes de parole）の相関者」[38]、「発話行為と理解（compréhension）の媒介（medium）であるかぎりでのシステム」[39]であることになる。メルロ＝ポンティがソシュールの「構造」概念を理解しているのは、このような文脈においてであり、それはあくまで「語る主体」の発話行為との相関において理解されており、発話の決定因や形式的な法則として理解されているのではない。

そして語の意味に関して、言語体系（ラング）内でその語が持つ示差的な位置、つまり他の語との差異がその語の価値（valeur）である、とする、意味論的な議論に関して、メルロ＝ポンティはソシュールの次のような文を引用している。

「同じ言語体系（ラング）の内部において、近接する観念を表現するすべての語は、たがいに限定し合う。」[40]

「それゆえ、どんな場合も、私たちは、前もって与えられた観念の代わりに、システムから発出する価値を手に入れるのである。」[41]

「それら（価値）が概念に対応していると言われるときに、概念はただ示差的（différentiel）であり、その内容によって積極的に定義されるのではなく、システムの他の諸項との関係によって消極的に定義される。すなわちそのもっとも正確な特徴とは、それが他の諸項がそれではないところのものであるということである。」[42]

「語において重要なこと、それは音そのものではなく、その音を他のあらゆる音から区別することを可能にする音声的差異であって、なぜなら意味作用（signification）をもたらすのはこの差異だからである。」[43]

このようにソシュールからの引用を積み上げながら、すでに知られているとおり、メルロ＝ポンティは記号（signes）が対立的（oppositives）、相関的（relatives）、消極的（négatives）な存在であり、「その他のものとの不一致」[44]によってしか働かないことを導き出し、それを「隔たり（écart）」[45]とする。そして、このような「差異」の考え方から、記号の「恣意性（arbitraire）」と「動機づけ（motivation）」[46]を導き出すのである。

この「恣意性」の概念を語るに際して、メルロ＝ポンティは「伝統（tradition）」の概念を援用してくる。メルロ＝ポンティ自身が、フッサール『幾何学の起源』での「伝統は起源の忘却である」[47]という言葉を好んで引用し、ここでも同じ表現が援用されているわけだが、メルロ＝ポンティはここでも、次のようなソシュール自身の表現から引用することを怠っていない。

「記号が恣意的であるからこそ、それは伝統より他の法則を知らないのであり、記号が恣意的でありうるのは、それが伝統に基づいているからである。」[48]

このソシュールの言葉と、現象学における「制度化（institution、あるいは創設　Stiftung）」の理論がメルロ＝ポンティの中で結びついていたことは明らかであり、これまで研究者たちもそのことを指摘してきている。[49]「個人と制度の関係」[50]という、メルロ＝ポンティの大きな問題設定の内部で、フッサール現象学における発生的な受動的総合の

理論とソシュールにおける記号の恣意性とことば（パロール）における語の意味の理論が連結される可能性が、ここから展望されよう。まさに「論理主義」と「歴史主義」を素朴な態度として排し、経験の本質への回帰を主張することは、「話す」という言語の現象へと回帰することであり、したがって事実学としての「言語体系（ラング）」の言語学から、「話す」という現象の本質を反省記述的に把握する言語の現象学へ、という道筋もここからは見えてくるだろう。メルロ＝ポンティは、ソシュールから少し離れて、ヴァレリーの「デルフォイの巫女」を暗示しながら、次のように述べてもいる。

「誰かが話すとき、他のことが起こる。そのときに、音が意味し始め、意味が音の中で生き始めるのであり、言語（langage）がおのずと作り直され、真理の現象が存在する。記号は、意味を手にしながら、それでもそれを口に出した人の彼方を指し示し、それについて語られているものの声そのものとして姿を現すのである。」[51]

こうして、『ことば（パロール）の問題』講義は、「歴史主義」及び「論理主義」としての言語科学を批判しながら、「語る主体」が話すときに生じることについての分析を主題化しようとする。言語学的分析は「発話行為（acte de parole）」の内面に維持されねばならない、とメルロ＝ポンティは述べている。[52]「語る主体」が「語る」ときにその内部で生じていること、ソシュールが「心理学的」と形容しながら、それ以上の分析を施すことのなかったこの事態に迫るためにメルロ＝ポンティは、この講義で、クルト・ゴルトシュタインの失語症研究とヘレン・ケラーの自伝（『わが生涯』）に見られる事例の解釈を行なっている。[53]機能主義や構造主義が早々に放棄した「語る主体」の内部の現象という困難に、語ることのできない主体、また、語ることができなかったが、語りはじめることができるようになった主体の事例から向かおうとするわけである。つまり、すでにこの講義に先立ってソルボンヌ大学での講義で扱われていた「言語の習得」の問題が、ここで「語る主体」の生成の考察に用いられることになる。[54]これは、ある意味では、ソシュールやゴルトシュタインについての考察は一九四九―一九五〇年ソルボンヌ大学での「意識と言語の獲得」講義[55]の内容の取り上げ直しであるとも言えるが、やはり、『ことば（パロール）の問題』講義録で、詳細がつかめるようになった箇所もある。

三　内的発話形式と間主観性の先取り

メルロ＝ポンティの哲学にとってクルト・ゴルトシュタインからの影響は非常に大きなものがある。『行動の構造』や『知覚の現象学』の議論の多くのものがゴルトシュタインの著書や論文から示唆を受けており、失行症や失認症などの事例の多くをそこから引用していることはよく知られている。端的に言えば、メルロ＝ポンティが「構造（structure）」という語を用いるときに、そこには多分にゴルトシュタインの「形態化（Gestaltung）」が含意されていたのであり、音素分析における構造主義という構造言語学に先立って、有機体における「ゲシュタルト（形態　Gestalt）」という意味での構造概念をメルロ＝ポンティは使用していた。[56]

『パロールの問題』講義では、ソシュールに続いて、ローマン・ヤーコブソンへの批判の後、ゴルトシュタインの一九四八年の論文「言語と言語障害（*Language and Language Disturbances*）」が取り上げられ、ヤーコブソンとの比較において高い評価が与えられている。

音素分析の構造主義の立場から失語症を研究したヤーコブソンに対して、その二元論的態度を批判しながら、メルロ＝ポンティはゴールトシュタインを「言語のシステムと音素的システムを世界や他者との関係に置き戻す」[57]として評価している。ヤーコブソンは初発的に簡単な音素から複雑な音素へと階層的に構造化される音素獲得のシステムの法則として「基づけ（Fundierung）」[58]の概念を重視したが、メルロ＝ポンティがフッサールの概念として理解しているのは「基づけるもの」と「基づけられるもの」が相互依存的で双方向的な全体的システムであるのに対して、ヤーコブソンのそれは「依存」の側面しか見ていないことが批判される。[59]

むしろ、ゴルトシュタインにメルロ＝ポンティが読み取っているのは、そうした音素の構造が「有機体」にとって水準づけられている、という指摘であり、「構造化（structuration）」は「世界との関係」[60]であり、「依存の順序は、音素それ自体によって規定されるのではなく、それらの音素が入っていく形態化（Gestaltung）によって規定される」[61]のであって「何らかの差異化（différenciations）が可能であるのは、すでになされた他の差異化の枠内でのみである。」[62]

ソシュールの音素が示す差異のシステムとしてのラングという着想は、有機体と世界の関係から生じてくる「形態化」「構造化」と比されるものとメルロ＝ポンティは理解しているようで、この点で、ゴルトシュタインが援用される。人間が言葉を話す、とか、幼児が音素を獲得する、というのは、ただ音素の複雑性が構造的に漸次獲得されている過程であるのではなく、有機体としての、したがって身体としての人間が、その環境との関係や他者との関係の中で行動の志向を獲得していく過程に比されるのであって「いずれにせよ順序は、簡単なものから難しいもの自体へ、ではなく、特定の瞬間に、その世界と他者との関係の様相に対する有機体の課題への関係によるものである。」[63]

したがって、音素の獲得過程に先立って、有機体（身体）の、環境や他者との関係性が先にあることになる。こうした点で、エミール・バンヴェニストの論文「インド・ヨーロッパ語の語彙における贈与と交換」が言及され、金銭などの「交換（échange）」の構造が人間の世界に固有な法則として、他者との根本的な関係であることが触れられる。[64]メルロ＝ポンティは、言語の獲得を、音素の獲得の構造的複雑化としてとらえるのではなく、世界や他者との交換的な関係の中で、構造化、すなわち差異化とその相関からなる全体化の過程から見ようとしているように思われる。

「話すことを学ぶこととは、絶体的に区別され正反対でさえあるような意味づけを獲得することではなく、差異化（différenciation）、弁別化（discrimination）の原理を獲得することである。」[65]

こうして言語体系（ラング）を弁別的記号からなるシステムととらえたソシュールと、失語症を構造化の解体、差異化の解消として有機体の全体構造の中で把握しようとしたゴルトシュタインが並べて称される。

「結論として、話すことは、概念のための記号を持つことではなく、概念や記号以前に世界を分節化することができることである。各々の言語において、言語と思考を同時に秩序づけている分節化（articulation）の原理を把握すること。」[66]

この「分節化（articulation）」の原理とは「差異化」の原理に他なら

ず、ソシュールが言語体系（ラング）の体系内での音素の弁別的価値の次元で論じた「言語学的な層」の事柄を、ゴルトシュタインは「前言語学的な層」へと置き換え、そのことによって言語体系（ラング）を「世界内存在（l'être au monde）」に挿入する、とメルロ＝ポンティは述べている。[67]「世界内存在」とは、彼の哲学においては、「世界」や「他者」への関係の媒介としての身体に他ならない。つまり、一般的に言語学者によってはソシュールと比較して論じられることのない神経生理学者ゴルトシュタインが疾病を説明する際に用いる「差異化（différenciation）――脱差異化（dédifférenciation）」の構造概念、またこの「差異化」の原理を有機体的な「形態化」「構造化」としてとらえた考え方を導入することによって、ソシュールの言語学における「差異」の概念をメルロ＝ポンティの「世界内存在」の概念、つまり「現象的身体」の概念と接合する道が開けてくるのである。別の言い方をすれば、ソシュールの「語る主体」を、ただ言語学における音素的差異を発声する主体、発声の器官としての口蓋や咽喉、その調節に必要な解剖学的装置を備えた身体としてではなく、他者との関係の内にある世界内存在であるかぎりでの「語る主体」としての「語る身体」という次元に置き直すことで、「話す」「語る」ということの本質に迫ろうとしているようにも思われる。

そしてメルロ＝ポンティは、ゴルトシュタインがフンボルトの「内的言語形式（innere Sprachform）」を援用していることに着目する。[68]「内的言語形式」とは、フンボルトがジャワのガヴィ語の研究から導き出した概念であり、言語共同体内部でその各成員間の言語コミュニケーションを可能にする、各成員に共通の言語の創造的形式のことである。その内容を正確に理解することは困難であるが、共同体の文化伝統の一形式である言語を、その言語を話す主体と結びつけ、その話す主体の内部で言語を創造的に生産して使用することを可能にするある形式のことである。ゴルトシュタインは、おそらくカッシーラーのフンボルト解釈[69]からも影響を受けつつ、この「内的言語形式」を「世界への視点」[70]と規定しながら、彼がかつて提出した「カテゴリー的態度」概念のさらに根本で働くものとして想定していくのだが、メルロ＝ポンティはそれを評価しているわけである。

しかし、これは危険な逆行ではないか、という批判も予想される。フンボルトは、特定の民族の言語に優位を認めることは控えていたとしても、このような内的言語形式を「民族精神」と結びつけていたのではないだろうか。[71]メルロ＝ポンティは、構造主義的な言語学を批判するあまり、ロマン主義的な言語学へと回帰してしまっているのではないか。このような懸念が浮かぶわけであるが、さすがにメルロ＝ポンティは、この内的言語形式を「民族精神」のようなものと結びつけることを警戒しており、すでにソシュールについて言及された際にそのことは示されていた。メルロ＝ポンティは、次のように、ソシュールをロマン主義的な言語観と批判的に対置している。

「言語体系（ラング）を外的精神によって生気づけられた主体にしてしまう哲学者たち（たとえばシェリング――フンボルト）との対照によって見えるようになるソシュールの独創性」[72]

結局は言語体系（ラング）はコミュニケーションを行おうとする語る主体たちの間にあるのであって、何か言語の外部に存在してそれを駆動する「精神」なるものを想定するには及ばない。メルロ＝ポンティはことば（パロール）を、あくまで「他者」と「世界」への関係としてとらえようとしている。

話を元に戻すと、メルロ＝ポンティは、ソシュールの「差異」の原理を「差異化」ととらえ直すことによって、失語症のような疾病を「脱差異化」としてとらえたゴルトシュタインに結びつけながら、[73] 言語体系（ラング）内の音素の差異から、それを実際に語る主体における差異化と形態化に結びつけ、語る主体がそのことによって世界と他者との関係に他ならないことを示唆し、言語学的次元での差異と差異化をめぐる議論を、前言語学的な、身体的・知覚的次元での差異と差異化の議論とに接合しようとしているように思われる。メルロ＝ポンティは、次のように課題を整理している。

「後に残されるのは、内的言語形式の身分を正確にすること、感じられる意識そのもの（隔たりによる意識）の理論を作り直し、ことば（パロール）による意味作用の解放を理解することであろう。

そこからわかることは、思考と言語あるいは言語体系（ラング）の同一性ではなく、思考とことば（パロール）の、つまりその前言語学的領野（champ prélinguistique）をともなった言語学的行為の同一性である。外的言語、発音された、あるいは内面的な語、想像の中で言われた語――そこにあるのは真のことば（パロール）の十分条件ではない――という意味ではないことば（パロール）、つまりそれらの内的組織化という意味でのことば（パロール）である。この組織化は自分のものとなった身体（corps appproprié）においてしか実現されない、ということは本当である。」[74]

こうして『ことば（パロール）の問題』講義でのソシュール言及は、ソシュールにおけるさまざまな概念使用を検討しながら、最終的には「語る主体」と「世界」や「他者」の関係における、「前言語学的領野をともなった言語学的行為」としての「ことば（パロール）」へと、そしてその「語る主体」の身体の問題へと帰着していく。この意味では、メルロ＝ポンティは、ソシュールの言語学へと言及しながら、当初からの、つまり『行動の構造』や『知覚の現象学』の自分の問題設定を、ソシュールの「差異」の概念によって磨き上げていこうとしていたことがわかる。『知覚の現象学』では、たとえば、空から降ってきた「あられ」に初めて触れたときの感覚と驚きからその語を理解するときの例が挙げられ、知覚の分節化と言語の分節化の接触の場面、そして言語の分節化による知覚の分節化の場面が語られていた。「語る主体」への回帰は、「語る主体」が語り始めるとき、語ることができるようになったときに「語る主体」の内部で起こっていることを問題とすることへとつながる。メルロ＝ポンティは、ヘレン・ケラーの自伝をもとに、その点について簡単に考察を加えている。

四　最初のことばの問題

メルロ＝ポンティは『ことば（パロール）の問題』講義に先立つ一九四九年―一九五〇年のソルボンヌ大学講義「意識と言語の習得」で、簡単にヘレン・ケラーの例に触れている。その例とは、のちの映画『奇跡の人』[75]の一場面としても有名な、水に触れているヘレン・ケラーの手に、サリバン女史が「水　w-a-t-e-r」と綴り、ヘレン・ケラーがことばを習得する、という例である。

カッシーラーがその著書『人間』[76]で、人間が「シンボル的機能」を獲得する劇的な場面として紹介したこの逸話を、メルロ＝ポンティはソルボンヌ大学での講義で取り上げているが、それはまず主知主義的な言語観の好む例として、批判的・懐疑的に語られている。

メルロ＝ポンティにとって主知主義（知性主義）的な言語観とは、記号が意味になるのは、それが「心的記号（signe mental）」あるいは「語詞映像（image verbale）」と結びつく場合であるとする言語観である。[77]「記号」と「意味されたもの」との結びつきが突然獲得される例として、ヘレン・ケラーの例が主知主義的な言語観に援用される点に、メルロ＝ポンティはまず懐疑的な見解を述べている。つまり、主知主義的な言語観における、言語以前の自然的で感覚的な混沌とした沈黙の生と、そのような沈黙の生活とまったく区別される、記号的な過程としての言語を獲得した意識の生あるいは知性の生との二者択一的な考え方にとって、この例は好都合なものとして利用されがちなのである。つまり、そのような考え方は、言語があるか、ないか、という二者択一であり、言語のない混乱した沈黙の生か、言語を自由に利用する精神あるいは知性の生か、という二者択一の観点から、言語以前の生と言語獲得後の生とを非連続的にとらえる考え方である。

ソルボンヌ大学での講義では、ヘレン・ケラーの例はそれ以上問題とはされず、ピアジェなどを批判しながら発達的な言語獲得の過程が検討されていたのだが、『ことば（パロール）の問題』講義では、ヘレン・ケラーの例について、主知主義とは異なる観点から、もう少し検討が加えられている。

メルロ＝ポンティは、ヘレン・ケラーが言語を獲得する以前の「沈黙」と「不透明さ」の中の生活における「怒り」に注目する。[78]この「怒り」は「意思伝達の失敗」[79]に対する怒りであり、あるいは「目的の直接的な視野」はあるが「そこに到達する手段がない」ことへの怒りである。[80]メルロ＝ポンティは、この「怒り」が向けられる他者の存在を指摘する。「ことば（パロール）による伝達（コミュニケーション）の、分節化されていない先取り（anticipation）」[81]がそこにはある。今日の認知言語学者が「共同注視」などを取り上げながら、幼児の言語獲得の社会的機能の側面を指摘するように、[82]メルロ＝ポンティは、主知主義的な言語観が「心的記号」と「意味されたもの」の結合が一挙に獲得されるのを重視するのに反対して、また音韻論、形態論的な言語学が音素の獲得を重視するのに反対して、言語獲得に先立つ身体レベルでの他者への志向の存在、たとえば幼児にとっての母親の身体の存在の意義を指摘するのである。

「身体の言語（langage du corps）が、そのすべての重みをかけて、本来の意味でのことば（パロール）を呼びもとめること、母親の周囲に集中した感じること（sentir）の塊そのものが、感じることがそこで意味（sens）へと移りゆくくぼみ（creux）の到来という意味で重みをもつこと、そしてそのようにして一種の引き金（détente）を見出すものだということを認めなくてはなくてはならない。母親のことば（パロール）は〜へ向けてひとつの意味を導き入れる。音声的音楽的システムはこの情動的再認識の道具でしかない。感じることのなかに諸々の布置（configurations）があること、身ぶりのなかに全体の暗黙の先取りがあること、知覚された世界のロゴスがあること、したがって、主体は……への開け（ouverture）であること、この根源的な視点は、なるほど分節化され、作り直されるべきものであるが、まず誕生（naissance）によって与えられ、それにつづいて、〈君が話すのにつれて、私は聴く〉（クローデル）ことだけが証明される。」

ヘレン・ケラーの「怒り」は「沈黙した間主観性の情動（la passion de l'intersubjectivité muette）」[84]を示しており、彼女は言語が欠けている状況にあるとはいえ、他者が欠けている状況にあるわけではないこと

を示している。「心的記号」と「意味されたもの」の結合以前にただ混沌があるわけではなく、「感じること（sentir）」が「意味（sens）」へと移っていくような、身体的に他者と関わっている状況におけるゲシュタルト形成が存在しているわけである。

だが、それでも、ヘレン・ケラーは、手に触れる冷たいものと「水（water）」と綴られたことばを結びつけた後、すべての物に名前があることを理解し、その日のうちに三十ものことばを覚え、彼女の前に、一挙に言語的世界と意味の開放が与えられたこともたしかである。「ことば（パロール）」とともに、「私の触れていたすべてのものは、いのちで震えていた」[85]という彼女のことばを、メルロ＝ポンティは書き留めている。彼女は、知覚的・感性的世界の「沈黙した間主観性」の世界から、「語る主体」たちのコミュニケーションからなる言語と表現の間主観性の世界へと移行したのであり、彼女もはっきりそれを認識している。

メルロ＝ポンティもそのことを認めている。「ことば（パロール）」の導入は、知覚された世界を変え、他者との関係を変える。ことばの獲得とともに、自己中心性から脱して相互性が獲得され、「他者は内面性を存在しており、もはや外面的な極のようなものではない。」[86]

だとすると、ここで重要になってくるのは、「ことば（パロール）」を獲得することによって、世界と他者が獲得し直される、ということであり、かつ同時に、その「ことば」を獲得することを可能にした、「ことば」に先立つ世界と他者との関係が「ことば」によって生き直されることによって維持されている、その論理を把握することであろう。

ここでメルロ＝ポンティは「同一性に対する差異のはたらき」が「媒介」を可能にする、と述べ、それを「想起（reminissence）」[87]として、ヘレン・ケラーのことばを書き留めている。

「私に、とつぜん、長いこと忘れられていた何かについてのふたしかな思い出がやってきた。」[88]

ヘレン・ケラーは、ことばを習得する前に、ただ暗闇と混沌を生きていたわけではない。「何か」があったのであり、ことばを習得してみると、それは「長いこと忘れられていた」と思われるのであり、ことばの習得とともに、それを名指し、他者に伝えることができるようになると、「ふたしかな思い出」であったことになるわけである。

感覚的・知覚的に把握されている「何か」、言語で他者に伝達することのできる形にまでは至らないが、すでにある種の「構造化」あるいは「形態化」がなされている「何か」が、ことばの習得とともに、言語体系における弁別的な記号相互の差異に基づく意味の構造のなかに組み入れられ、言語としての意味を獲得し、語る主体の経験を再構造化、あるいは再形態化する。しかし、それは無から生まれたのではなく、生き直され、とらえ直された経験であって、「長いこと忘れられていた何か」は、後になってから捏造されたのでもなければ、言語に言い表されることで無に帰したのでもない。この経験は「新しい他者、新しい自己、新しい知覚される世界の到来」[89]であり、感性的・知覚的な志向的関係が言語の志向的関係として、柔軟な、自由なものとなることであるが、「知覚される世界の重み」[90]は消え去るわけではない。「ことば（パロール）」は、ある意味では、「ことば（パロール）に先行するものの完成」[91]なのである。

もちろん、そうは言っても、人間が、通常は幼児期に到来する最初の言語習得の段階の言語使用にとどまるわけではないし、言語の本質

をそこに集約させることはできないことは言うまでもない。それだけでは、他者との間主観的な世界への「加入（initiation）」[92]という側面での言語の本質を示すことはできても、言語とともに、つまり語ることとともに開かれてくる世界へと、「世界と私たちの前客観的関係の前歴史的沈殿物」[93]をその外へと連れ出す際に、言語が歴史的、伝統的にすでに「優位（prédominance）」[94]にある、という側面を示すことはできていない。「ことば（パロール）」は「言語体系（ラング）」なしにあるわけではない。だとすると、「ことば（パロール）」が「言語体系（ラング）」の内部にありつつ、それを超えていく働きをもつことについて記述するのでなくては、「ことば（パロール）」が、ありきたりの常套句や自動的な反応のように反復される定型的な表現において経験を覆い隠してしまう面のあることが見逃されてしまうことになろう。そうした、「ことば（パロール）」の創造的なはたらきについては、文学の言語などが参照されることになるだろうし、『ことば（パロール）の問題』講義は、その最後の部分をプルーストについての考察にあてているのだが、それについて論じることについては他日を期したい。

五　結論

このように、『ことば（パロール）の問題』講義の前半部分を検討してみることによって、私たちは、当面、次のように結論してみることができよう。

まずメルロ＝ポンティの哲学の研究史的観点から言うと、一九五〇年代の論考におけるソシュールへの言及から、いわゆる「中期」の言語論的探求が始まった、とする解釈について、『ことば（パロール）の問題』は、いくつかの視点を提供してくれる。[95]この講義において、ソシュール言語学への言及は、「歴史主義」や「論理主義」への批判、またソシュールの後継の諸言語学派やサイバネティックスへの批判、「言語体系（ラング）」に対する「ことば（パロール）」の優位、「語る主体」への回帰の要請という側面からなされるが、それが「制度化」の問題における「語る主体」の位置を問うものであることに応じて、それまでメルロ＝ポンティが依拠してきたゴルトシュタインの失語症研究や言語習得についての研究に接続され、ソシュールにおける「差異化（différenciation）」の原理がゲシュタルトとしての「形態化（Gestaltung）」「構造化（structuration）」と並行して理解され、「ことば（パロール）」を「世界や他者との関係」としてとらえるという文脈に置かれていることがわかる。つまり、メルロ＝ポンティは、身体をあくまで世界や他者との関係の媒介としてとらえていた自身の立場を維持していた、と考えることができる。それまでの行動や知覚についての考察との、ある種の連続性や一貫性のもとに、彼のソシュール解釈を理解する必要があることがわかる。行動や知覚において、身体としての世界内存在が環境と取り結ぶ初発的な意味の関係という観点をメルロ＝ポンティはけっして放棄していないし、むしろそのような初発的な意味の形成の構造についての理解抜きには、「差異化」における弁別的意味のシステムの把握は不可能であることになろう。

また、このようにして、言語を、「語る主体」がすでに内属している前客観的な間主観的世界に基づけながら、言語において、「語る主体」が語る際に、それまでは言われていなかったこと、既存の言語においては表現されないと思われていた「何か」を語るという可能性、原初的な世界の経験を「征服する（conquérir）」という創造的言語の側面[96]をとらえながら、「ことば（パロール）」が感性的経験に対して優越する、つまり先立って支配的な位置にある、という事態も最終的に

は認めている。もしメルロ＝ポンティの「中期」に言語の問題が浮上したとするなら、それはソシュール言語学の導入ではなく、『知覚の現象学』では「語ることば（parole parlante）」としてだけ示されていた言語の創造的機能を、「語る主体」の制度化における「世界や他者との関係」の下にあるコミュニケーション的な言語の初発的実践の場面との両義的な関係を維持しつつ把握しようとする、問題設定の移動によると考えるべきであろう。すなわち、「制度化（institution）」概念の彫琢による、「語る主体」における、言語という歴史的制度の「沈殿」と発話行為の実践における「再活性化」の受動的総合の循環的構造の内在的考察の必要性であろう。それは、やがてメルロ＝ポンティによって「肉（chair）」と呼ばれることになる身体の可逆的、交差配列的な構造にまで導かれていく問題設定でもある。[97]

言語の初発的実践と創造的機能のこのような関係は、まるで、地上にとどまりながら地上から飛び上がるにはどうすればよいか、とか、茶碗から手を離さずに茶碗を手放すにはどうすればよいか、といった、禅問答のようにも見えてしまうが、私たちが語るときに、語ることのできない「何か」を保ちながら、その「何か」を語ってしまっている、という感触をもつときや、私たちがある種の「ことば」の中にとどまりながら、何か「ことば」の中で済むわけではないことを語っていて、「ことば」は「ことば」のままなのに、「ことば」の中の何かが生まれ変わった、ということがたしかにあり、そのとき、私たちは「何かを語った」、「何かが語られた」、つまり「ことば」が機能した、「ことば」がそこにあった、という感想をもつのではないだろうか。[98]そこでは、「ことば」を離れずに、そのまま、そこで「ことば」を離れる、あるいは「ことば」を離れて、そのまま、そこで「ことば」が実現される、という、矛盾律的にはおよそ理解しえない対立項の交換や可逆性や移入が、知覚的世界の「形態化」の原理と、言語の「差異化」の原理とに潜んでいることが感知されないだろうか。[99]言語の限界のこのような超過や移動といった事態は、言語が歴史的に形成され、変化していくものであること、この変化そのものと「語る主体」が「語る」という行為とが重なり合っていることとも関連していることだろう。[100]「語る」という行為は、行為であると同時に、言語の歴史性において生じる「出来事」でもある。

ここから、ただメルロ＝ポンティの哲学の研究者しか関心をもたないような研究史的観点を離れて、この『ことば（パロール）の問題』講義をより広い哲学的な「ことばの問題」に置き戻すことができよう。あえて言えば、その問題設定は、次のようなものと言えるだろう。

哲学は真理を語り、存在を語ろうとする言語実践であるが、哲学が言語そのものについて考察する際に、言語を歴史主義と論理主義など既存の客観主義的言語観の素朴な見方に固定してしまうのではなく、また主観主義的で構成主義的な言語観に安住することなく、ことばが話されるその現場に差し戻すことから始めなくてはならない。その際、思考と言語と知覚経験あるいは感性的経験との関係は、単純に層のように積み重ねられるのではなく、まさしくそこで生じている「交換」としての「構造」に貫かれたものとして把握されなくてはならず、この「構造」とは「差異化」であり、同一性原理のさらに根底にある生成の働きであって、この生成の働きとしての「構造」において、世界や他者との関係として、その関係のただ中で語りはじめる主体の身体性とともに、歴史的な制度と個人的な行為との循環的で生成的な「制度化」の展望が開かれる。あまりに言語を純粋化してしまうと、真理や存在を語ることは不可能に見えるか、言語を超えた神秘的

な精神のようなものによってそれらがすでに完成されてしまっていたように見えるかもしれないが、結局哲学の言語表現も他の言語表現と同じく、世界や他者との関係の中での制度的・社会的・歴史的な行為であり、あらゆる歴史的な行為と同じく、完成に達することも、無意味に帰することもなく、真理や存在をそれらの交換と伝達の流動的関係の中で表明しようとしているのであって、思考と言語の主体は、独りでありつづけることも、独りでいなくなることも困難な、交差配列的で可逆的な交換と転移の運動において生成しつつあるのである。

注

（1）『ことば（パロール）の問題』の編者が示しているとおり、彼がソシュールに言及している論文として、「人間の内なる形而上学（Le métaphysique dans l'homme）」（『意味と無意味』所収）、「言語の現象学について（Sur la phénoménologie du langage）」「間接的言語と沈黙の声（Langage indirecte et la voix du silence）」「モースからレヴィ＝ストロースへ（De Mauss à Levi-Straus）」（いずれも論文集『シーニュ』所収）、それらのプロトタイプとして「科学と表現の経験」「間接的言語」（いずれも『世界の散文』所収）などがある。また『見えるものと見えないもの』の「研究ノート」にも散発的に、ソシュールの名前が言及される。
Maurice Merleau-Ponty, *Sens et non-sens*, Gallimard, 1996.（邦訳『意味と無意味』　木田元・滝浦静雄他訳　みすず書房　一九八三年）
Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960.（邦訳『シーニュ』1、2　竹内芳郎監訳　みすず書房　一九六九年、一九七〇年）
Maurice Merleau-Ponty, *La prose du monde*, Gallimard, 1968.（邦訳『世界の散文』　木田元・滝浦静雄訳　一九七九年）
Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964.（邦訳『見えるものと見えないもの』　木田元・滝浦静雄訳　みすず書房　一九八四年）
メルロ＝ポンティは、コレージュ・ド・フランス開講講演「哲学を讃えて」でもソシュールに言及している。
Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, Gallimard, 1953.（邦訳は『眼と精神』　木田元・滝浦静雄訳　みすず書房　一九六六年　所収）
講義では、一九四九年―一九五〇年ソルボンヌ大学での講義「意識と言語の獲得（La conscience et l'acquisition du langage）」でソシュールについて講義している。
Maurice Merleau-Ponty, *Merleau-Ponty à la Sorbonne, résumé de cours 1949-1952*, cynara, 1988.（またその再刊として *Psychologie et pédagogie de l'enfant, Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier, 2001.）（邦訳『意識と言語の獲得　ソルボンヌ講義　1』　木田元・鯨岡峻訳　みすず書房　一九九三年）
本論文で取り上げた「ことば（パロール）の問題」講義のメルロ＝ポンティ自身による要録は、『コレージュ・ド・フランス講義要録　一九五二―一九六〇』収録されている。
Maurice Merleau-Ponty, *Résumés de cours 1952-1960*, Gallimard, 1968.（邦訳『言語と自然』　木田元・滝浦静雄訳　一九七九年）

（2）Ernst Cassirrer, *Essay on Man, An Introduction to a Philosophy of Human Culture, Gesammelte Welke, Band 23*, Felix Meiner Verlag, 2006, P.133.（邦訳　エルンスト・カッシーラー　『人間』　宮城音弥訳　岩波文庫　一九九七年　二六〇頁以下）

（3）Maurice Merleau-Ponty, "Un inédit de Merleau-Ponty" dans *Parcours deux, 1951-1961*, Verdier, 2000.（邦訳「メルロ＝ポンティの一未公刊文書」前掲『言語と自然』所収）

（4）日本でのメルロ＝ポンティの言語論研究は非常に多く、紙幅に限界もあるので、ここでは言語を主題とした研究書に限定して示しておく。
加賀野井秀一『メルロ＝ポンティと言語』世界書院　一九八八年
長滝祥司『知覚とことば　現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い』ナカニシヤ出版　一九九九年
河野哲也『メルロ＝ポンティの意味論』以文社　二〇〇〇年
宍戸通庸『言語のアクチュアリティに向けて　ソシュールとメルロ＝ポンティを中心に』松柏社　二〇一三年
西口光一『メルロ＝ポンティ言語論のエッセンス』福村出版　二〇二二年
また、メルロ＝ポンティの哲学全般について論じた著書でも例外なくメルロ＝ポンティのソシュール解釈が取り上げられるが、ここでも代表的なものに限定しておく。
木田元『メルロ＝ポンティの思想』岩波書店　一九八四年
加賀野井秀一『メルロ＝ポンティ　触発する思想』　白水社　二〇〇九年

なお、ソシュール研究者の側から、メルロ＝ポンティのソシュール解釈を積極的に評価した論考として、丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店　一九八一年（のちに『丸山圭三郎著作集第一巻』岩波書店　二〇一四年に収録）

（5）ソシュール言語学における有名な区別であり、すでに専門用語として訳語も定着していることと思われるが、ここではメルロ＝ポンティの理解や用法に合わせて、一応の訳語として「ラング（langue）」を「言語体系」、「パロール（parole）」を「ことば」と訳し、丸括弧内にカタカナでその原語を指示することにする。ソシュールの言語学の文脈で考えれば、「発話」「発話行為」と訳すこともできようが、メルロ＝ポンティが「パロール（parole）」と言うときには、かなり広範囲な言語の場面が考えられており、ここでは「ことば」と訳しておくことにする。「パロール」がソシュールの「ラング」との対で意味を持たされている場合と、フランス語の一般的な使用において理解されている場合との区別が困難だからでもある。

（6）河野哲也　前掲書　一〇〇頁以下参照。河野氏は、この点だけを取り上げたわけではなく、メルロ＝ポンティのソシュール解釈の背景に考察を加えており、構造主義言語学への批判を読み取っている。それは「ことば（パロール）の問題」講義を取り上げる本論文の視点と共通するものである。

（7）Maurice Merleau-Ponty, *Le problème de la parole, Cours au Collège de France Notes, 1953-1954*, Metis Presses, 2020.

（8）言うまでもなく、メルロ＝ポンティが取り上げていたのはバイイとセシュエの編集による『一般言語学講義』(Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechaye, Payot, 1971.) であり、ゴデル、エングラー、トゥリオ・デ・マウロの校訂版や原資料が出ている今日では、そのような観点からの批判的考察も必要かと思われるが、ここでは、メルロ＝ポンティによるソシュールの引用をそのまま用いることにする。『一般言語学講義』の資料をめぐる変遷は、加賀野井秀一『ソシュール』　講談社選書メチエ　二〇〇四年　六二頁以下参照。

（9）*Le problème de la parole*, p.50.

（10）*Ibid.*, p.49.

（11）*Ibid.*

（12）*Ibid.*

（13）Ibid., p.50.

（14）Ibid.

（15）*Ibid.*

（16）*Ibid.*, p.51.　メルロ＝ポンティは論理実証主義については、厳しい評価を下していた。たとえば、彼が編纂した哲学辞典『著名な哲学者たちもない（*partout et nulle part*）』の序文として執筆された「どこにもあり、どこにもない（*Philosophes célèbres*）」では、二〇世紀の哲学の傾向を「具体的な哲学」とした上で、論理実証主義だけはその外にある、とし、「具体的な哲学」への「最後の、そして最も精力的な〈抵抗〉」であると皮肉っている（*Signes*, pp.198-199.）。他方で、一九五八年の夏に開催されたコロックでのギルバート・ライルへの質問では、ヴィトゲンシュタインの名前も挙げながら、ライルが言語の概念分析の不十分さを指摘したことを評価し、「イギリスの分析哲学の枠組として彼が私たちに紹介した枠組」をライルが拡張していることを評価して、ライルに、「言語の使用価値、つまり単なる概念的定義に還元できない使用価値を前にして、ライル氏は、それを規定するために、私たちがただ分析哲学の反省だけではなく、言語科学のある部分がその素描となるような言語学的現象の内在的研究をあてにすることができる、ということを認められるでしょうか」と質問している。Maurice Merleau-Ponty, Intervention à propos de〈La phénoménologie contre The Concept of Mind〉de G.Ryle. in *Chiasmi* 20, Mimesis international,2018, PP.249-253. このような意味では、言語の概念的定義や指示された対象の記述の言語の限界を超えて、言語をその使用の側面から考察する後期ヴィトゲンシュタインや日常言語学派のような試みにメルロ＝ポンティは一定の理解を示していたし、言語の現象の研究という自身のテーマとつながる可能性も視野に入れていたと言える。メルロ＝ポンティとヴィトゲンシュタインとを考察した論考として、野家啓一「言語・身体・意味――ウィトゲンシュタインとメルロ＝ポンティ――」『言語行為の哲学』勁草書房　一九九三年　八一頁以下参照。

（17）*Ibid.*

（18）*Ibid.*

（19）*Ibid.*,p.90.サイバネティックスについての批判は、『自然』講義でも述べられている。Maurice Merleau-Ponty, *La Nature*, Seuil, 1995, pp.210-219.（邦訳『自然　コレージュ・ド・フランス講義ノート』　松葉祥一・加國尚志訳　みすず書房　二〇二〇年　二一六頁―二二七頁）

（20）*Ibid.*, p.89.

（21）*Ibid.*, p.74.

（22）*Ibid.*, pp.91-96.

(23) *Ibid.*, p.57.

(24) こうした点で、ソシュールの言語学を字義通り「言語（ラング）」の研究として受け取り、言語を「もの」にしてしまい、「こと」としてとらえていない、と批判する時枝誠記のソシュール批判と、メルロ＝ポンティのソシュール評価は対照的である。メルロ＝ポンティのように、ソシュールのなかに「ことば（パロール）」への回帰を読み取るなら、時枝の批判はソシュールの後継者には妥当しても、ソシュール当人の思想には妥当しないことになろう。時枝誠記『国語学原論（上）』岩波文庫　二〇〇七年　七四頁以下参照。

(25) *Ibid.*, p.59.

(26) *Ibid.*, p.60.

(27) *Ibid.*　メルロ＝ポンティが引用しているバイイ・セシュエ編ソシュール『一般言語学講義』の現在入手可能な版でのページを併記する。Ferdinand. de. Saussure, *Cours de linguistique générale*, texte établi par Charles Bally et Albert Sechehaye, Payot, 1972, p.19.

(28) *Ibid.* Saussure, *op.cit.*, p.21.

(29) *Ibid.* Saussure, *op.cit.*, p.37.

(30) *Ibid.* Saussure, op.cit., p.45.

(31) *Ibid.*

(32) *Ibid.*

(33) *Ibid.*, p.63.

(34) *Ibid.*

(35) *Ibid.*, p.64.

(36) *Ibid.*

(37) *Ibid.*

(38) *Ibid.*

(39) *Ibid.*

(40) *Ibid.*, pp.66-67. Saussure, *op.cit.*, p.160.

(41) *Ibid.*, p.67. Saussure, *op.cit.*, p.162.

(42) *Ibid.* Saussure, *op.cit.*, p.162.

(43) *Ibid.* Saussure, *op.cit.*, p.163.

(44) *Ibid.* Saussure, *op.cit.*, p.164.

(45) *Ibid.*, p.68.

(46) *Ibid.*, p.69.　メルロ＝ポンティは、ソシュールの以下のような文言を引用している。「言語体系（ラング）のシステム全体は、記号の恣意性という不合理な原理に依拠しており、この恣意性は、制限なしに適用されると、この上もない複雑化に行き着くだろう。しかし精神は、記号群のいくつかの部分に秩序と規則性とのある原理を導入することに成功するのであって、これこそ相対的に動機づけられているものの役割である。」*Ibid.*, p.70. Saussure, *op.cit.*, p.182.
ここで「動機づけ」と言われているものについて、メルロ＝ポンティはフッサールから借りる形で、『知覚の現象学』でも使用しており、それは知覚や行動において、因果性に基づく法則性ではなく、ある種の非決定性を帯びながら混沌や無意味ではなく、ある意味を持った秩序や形態を組織する構造として理解されている。メルロ＝ポンティが「恣意性」という語を用いたからといって、それはまったくの偶然的選択可能性ではなく、全体への指示を含んだ恣意性であり、「動機づけ」という語も、因果法則的な必然性に決定されているという意味を含むものではない。Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p.75.

(47) Maurice Merleau-Ponty, *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl*, transcription par Franck Robert, PUF, 1998, p. 33. Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, p.201.

(48) *Le problème de la parole*, p.70.

(49) 加賀野井秀一、前掲書　二二九頁以下参照。

(50) *Le problème de la parole*, p.40.

(51) *Ibid.*, p.88.

(52) *Ibid.*, p.89.

(53) メルロ＝ポンティの言語論におけるゴルトシュタインの位置づけについて、「制度化」概念を踏まえながら考察を加えた論考として、廣瀬浩司「メルロ＝ポンティにおける〈制度化するパロール〉：制度の間文化現象学序説」「論叢現代語・現代文化』第17号、筑波大学人文科学研究科現代語・現代文化専攻、二〇一六年、五五頁―七〇頁を参照。

(54) Maurice Merleau-Ponty, *Psychologie et pédagogie de l'enfant, Cours de Sorbonne* 1949-1952.

(55) 実際のところ、「意識と言語の獲得」講義と「ことば（パロール）の問題」講義では、ヤーコブソン批判やゴルトシュタインの「内的発話形式」の解釈、そしてソシュール言語学の解釈など、素材としてはかなりの重なりが見られることも事実である。ソルボンヌ講義のためのノートをコレージュ・ド・フランス講義のために転用した、という側面もあったのだろう。ソルボンヌ講義でのメルロ＝ポンティの言語学解釈についての重要な研究

として、酒井麻依子『メルロ＝ポンティ　現れる他者・消える他者　「子どもの心理学・教育学」講義から』晃洋書房　二〇二〇年　第一部第四章を参照。

(56) メルロ＝ポンティの「構造」概念については、木田元、前掲書、及び、河野哲也、前掲書を参照。

(57) *Le problème de la parole*, p.117.

(58) *Ibid.*　メルロ＝ポンティは、フッサールが『論理学研究』以来使用してきたこの概念を、『行動の構造』から一貫して使用している。またこの概念は、クルト・ゴルトシュタインが彼の病理学研究での構造概念に用いている。

(59) 「ヤーコブソンは、その研究の終わりに、普遍的な音素獲得の体系的で不変の秩序――あるいは、ある言語体系（ラング）に特殊な音素の獲得の不変の秩序――が、熱がなければ放散もない、というような、依存の客観的法則、基づけ（Fundierung）の客観的法則として受け取るべきであることを示そうとした。この基づけ（Fundierung）の関係は、そのような現象が、他の現象なしにはそれ自体では不可能であることを示している。」*Ibid.*

(60) *Ibid.*, p.118.

(61) *Ibid.*

(62) *Ibid.*

(63) *Ibid.*「構造」概念を「ゲシュタルト」の概念と結びつける観点は、すでにコペンハーゲン学派のブレンナルに見られる。ただし、ブレンナルが重視しているのは、全体に対する要素の依存の法則性であるようにも思われる。エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』みすず書房　一〇三頁以下参照。

(64) エミール・バンヴェニスト「印欧語彙における贈与と交換」前掲『一般言語学の諸問題』所収。バンヴェニストと同じく、メルロ＝ポンティも「交換」をマルセル・モースの『贈与論』に関連づけ、それをレヴィ＝ストロースの構造概念の考察に援用している。Maurice Merleau-Ponty, De Mauss à Claude Lévi-Strauss, *Signes*, p.144.

(65) *Le problème de la parole*, p.119.

(66) *Ibid.*, p.120.

(67) *Ibid.*, p.123.

(68) *Ibid.*, p.123.「内的言語形式」についてのメルロ＝ポンティの言及に注目した研究として、廣瀬前掲論文、河野前掲書が挙げられる。廣瀬浩司氏は、本論文と同じ講義の講義概要をもとに、「内的言語形式」を「パロールのスタイル」と規定する（廣瀬、前掲論文　六〇頁）。また河野哲也氏は「内的言語形式」をソルボンヌ講義でのギュスタヴ・ギョームの「言語下図式（Schéma sublinguistique）」と関連づけて論じている（河野、前掲書　六二頁以下）。ギュスタヴ・ギョームの「言語下図式」とメルロ＝ポンティの議論を考察したものとして、佐野泰之「〈語られた言葉〉の問題」『メルロ＝ポンティ研究』第19号　二〇一五年　一八頁―三二頁参照。なお、本論文の準備中に接することのできた野々村伊純氏の口頭研究発表「世界に対する関係としての言語」（日本メルロ＝ポンティ・サークル第28回研究大会　二〇二二年九月三日　龍谷大学）では、野々村氏はゴルトシュタインによる「内的言語（inner speech）」をヴィゴツキーの内的言語理論と関連させながら論じている。

(69) Ernst Cassirer, *op. cit.*, p.131.（邦訳　前掲書　二五八頁以下）　カッシーラーは『シンボル形式の哲学』第一巻「言語」でフンボルトについて論じている。Ernst Cassirer, Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil, Die Sprache, Felix Meiner Verlag, 2010, pp.98-106.（邦訳『シンボル形式の哲学［一］』生松敬三・木田元訳　岩波文庫　一九八九年　一七二頁―一八五頁）　同箇所では「内的発話形式」には言及されていない。「内的言語形式」については、遠藤龍二「フンボルトの「内的言語形式」について」『図書館情報メディア研究』第三巻1号　二〇〇五年　一頁―一七頁参照。同論文は、フンボルトの「内的言語形式」の本質を「ロマン主義的なもの」としている。

(70) *Le problème de la parole*, p.123.「内的発話形式とは、各々の言語体系（ラング）のうちに制度化された、話し手一般の視点であり、他者に呼びかけるしかたである。」（*Ibid.*, p.125.）

(71) フンボルトの「民族精神」と国民国家の関係については、互盛央『フェルディナン・ド・ソシュール〈言語学〉の夢「一般言語学」の孤独』作品社　二〇〇九年　二四頁―二五頁参照。また、フンボルトへのソシュールの評価の持つ人種理論上の問題点については、同書一一二頁―一一三頁。

(72) *Ibid.*, p.77.

(73) 「ソシュール（弁別的）とゴルトシュタインは神経病理学の深い概念と結びつく。疾患とは脱差異化（dédifférenciation）である。したがって、引き算ではない。それと相関して、言語は足し算ではない。高次の機能は、高次の段階ではない。そうではなくて、下位の活動の取り上げ直しである。したがって、二元論ではない。」（*Ibid.*, p.123.）廣瀬浩司氏は前掲論文において、『講義概要』に見られる表現を引用しながら、ソシュールとゴルトシュ

タインの結びつきについて的確に示している。廣瀬浩司、前掲論文、六一頁。

(74) *Ibid.*, p.131.

(75) アーサー・ペン監督作品『奇跡の人』（The Miracle Worker）は一九六二年製作である。

(76) Cassirer, *op.cit.*,pp.38-40.（邦訳前掲書　七九―八二頁）

(77) *Psychologie et pédagogie de l'enfant*, p.19.

(78) *Le problème de la parole*, p.111.

(79) *Ibid.*

(80) *Ibid.*

(81) *Ibid.*

(82) マイケル・トマセロ『心とことばの起源を探る　文化と認知』　大堀壽夫他訳　勁草書房　二〇〇六年　参照。メルロ＝ポンティの言語論とトマセロの議論の関連性については、齋藤瞳「メルロ＝ポンティの言語獲得理論――初期言語論から中期言語論へ」『現象学年報』25　日本現象学会　二〇〇九年　一三三頁―一四〇頁。メルロ＝ポンティは『世界の散文』では、「最初のことば」について、次のように述べている。

「最初のことばは、コミュニケーションの無の中で打ち立てられるのではない、なぜなら最初のことばはすでに共通のものであったふるまいから出現したからであり、私的な世界であることをすでにやめていた感性的世界のうちに根を下ろしていたからである。」（La prose du monde, p.60.）

(83) *Le Problème de la parole*, p.111.

(84) *Ibid.*, p.108.

(85) *Ibid.*, p.112.

(86) *Ibid.*　こうした点で、酒井麻依子氏前掲書における次の指摘は重要である。

「言語の獲得が、世界や他者に対する「構え」の構造の獲得であるという主張と併せると、言語活動はそれによって表現される意味や思考を表す一方で、同時にそれを表現する主体の世界や他者との関わり方といった存在様態、実存のスティルを表すと言えるだろう。」（酒井前掲書、九一頁）

(87) *Ibid.*, p.112.

(88) *Ibid.*, p.111.　メルロ＝ポンティはヘレン・ケラーの伝記の仏訳を使っているが、そこにはいくらか意訳も見られる。原文は、"Suddenly I felt upon misty consciousness as of something forgotten — a thrill of returning thought;" となっている。Hellen Keller, *The Story of My Life*, Doubleday, Page & Company, 1905. p.23

(89) *La problème de la parole*, p.112.

(90) *Ibid.*

(91) *Ibid.*

(92) *Ibid.*, p.108.

(93) *Ibid.*, p.113.

(94) *Ibid.*, p.113.

(95) 『ことば（パロール）の問題』講義の編者の一人であるフランク・ロベールは「あとがき」で、この講義が存在論への「新しい襞」となっていることを指摘している。*Ibid.*, p.241.

(96) メルロ＝ポンティにおける言語の創造的側面についての考察として、ミシェル・ダリシエ「メルロ＝ポンティと言語の「魅惑的機能」」酒井麻依子・佐野泰之訳　『立命館大学人文科学研究所紀要』No.107　立命館大学人文科学研究所、二〇一六年　一七七頁―二一三頁参照。また、佐野泰之『身体の黒魔術、言語の白魔術　メルロ＝ポンティにおける言語と実存』ナカニシヤ出版　二〇一九年の「終章」を参照。

(97) 廣瀬浩司、前掲論文参照。

(98) 上田閑照は「言葉から出て言葉に出る」と表現している。上田閑照『言葉』岩波現代文庫　二〇〇八年　九五頁。

(99) メルロ＝ポンティが用いる「交差配列（キアスム）」という表現は、彼がヴァレリーに見出したものである。Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, p.294. 引用されているヴァレリーの文章の一部は以下の通り。「まなざしが見つめあうやいなや、人はもはやまったく二人ではなく、一人きりにとどまることの困難が存在する。この交換――このことばはいいことばだ――は、きわめてわずかな時間に、転位や転換を実現する。二つの「運命」の、二つの視点の交差配列（キアスマ）。そこではそれは、一種の同時的相互限定からできている。」

(100) 佐野泰之氏はコルセウとメルロ＝ポンティを比較考察しながら、メルロ＝ポンティにおける言語変化の問題を考察している。佐野泰之「偶然のなかの論理――メルロ＝ポンティと言語変化の問題」『アルケー』25 関西哲学会　二〇一七年五五頁―六六頁参照。

（本学文学部教授）